BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

第２章　存在しない責任者

日本語初稿／英語版 Chapter 02 に基づく日本語編集

01 — 許可されざる同乗者

シェイドはハンドルに触れていなかった。盗み出した市の点検車両には自動運転装置があり、計器盤に表示されているものも、進行方向も、すべて正規の巡回業務を装っていた。検問を通過する際にも、車は自分が何者かを問われない。彼らが運んでいる男だけが、都市から名前を奪われていた。

後部座席のダニエル・ヘイヴル元大臣は両手を組み、窓に映る自分の顔を見つめていた。三十年間、彼は恐怖を政策へ変換する側にいた。いまはその政策を執行する仕組みから、わずか数分で認証を消された。車の登録簿には「乗員二名」としか出ていない。

「レイチェルのところへ連れていく」ロイが言った。

「彼女にはもう問題が山ほどある」シェイドが返した。「水処理地区で十七人が登録から消えた。そこへ命令書の署名者を連れていけば、歓迎されると思うか」

「私は捕獲指令には署名した」ヘイヴルが言った。「しかし、あの市民の登録抹消には署名していない」

シェイドはバックミラーを見た。「その違いを聞けば、当事者が安心するとでも？」

「いや」

「ようやく役に立つ答えだな」ロイは身をひねり、元大臣の顔を見た。自分を捕らえ、必要なら解体するよう命じた男。その事実は何ひとつ薄まらない。しかし同時に、いま彼が何を知っているのかを知る必要があった。

工業地帯の古い橋の下を黒い水が流れていた。かつて化学廃液を運んだ水路を、レイチェルの浄化網は少しずつ回復させてきた。橋の向こうに検問の青い光が見える。

前面ガラスに経路承認が並び、最後の検問だけが遅れて点灯した。承認そのものは下りたが、出力された時刻は彼らの到着予定より先だった。

「行き先を知っている者がいる」ロイが言った。

「誰がどこへ行くかを知っている者がいる」シェイドは言った。「それが問題なんだ」

ゲートが開いた。止めるはずの機械が先回りして道を開けたのだ。

「俺が思っていた以上に優秀なのか」シェイドは速度を落とさず言った。「あるいは、誰かが到着させたがっているのか」

ロイは黙った。後部座席では元大臣がガラスに映る自分の姿を見ている。都市のどの端末も、その男が存在した記憶を持たなくなっていた。

02 ― 十七人

レイチェルの管理する水処理地区は眠らない。夜間に動くのは大きなポンプだけではない。清掃車、医療輸送車、原水監視機、そして水を求める人々が、地下通路で互いを避けながら行き交っていた。

施設の外には十七人がいた。そのうち何人かは工事労働者で、何人かは家族の手を握っていた。住民カードを差し込んでも入口が開かず、公共の給水機は「受給資格なし」と表示する。彼らの身体に異常はなく、水の配管にも故障はない。ただ、情報上の接続が断ち切られた。

一人の少女が母親の袖をつかんでいた。

「名前は？」ロイが尋ねた。

「リナ」

「何歳だ」

「十歳」

「ここに住んでいるのか」

少女は母を見上げた。「お母さんは住んでる。でも、わたしはもう住んでないって」

扉は母親だけを通し、少女の前で閉じた。母はすぐ戻ってきた。その瞬間、少女は自分が家の外にいるのではなく、家という考えから追い出されたように感じたのだろう。ロイはその声を忘れないと思った。

レイチェルは元大臣に気づくと表情を変えた。

「問題を作った人を連れてきたのね」

「その一人だ」ロイが答えた。

レイチェルは十七人の記録を開いた。すべての生体情報は正常で、税・就労・教育・医療の過去データも保存されている。ただし現在の認証欄だけが失効していた。従来なら居住資格の停止後も最低限の飲料水は配給される。今回はその経路ごと閉じている。

「なぜ水から？」ロイが尋ねた。

「水なら、逮捕と呼ばずに人を消せるから」レイチェルが言った。「飲めなければ働けない。働けなければ住所を維持できない。住所を失えば、ほかの認証も連鎖して失効する」

「異議申立ては？」

「本人確認が必要よ」

「本人を目の前に置いても？」

「未確認とされるのではない。申立て資格がないとされるの」

ロイは端末の言葉を読んだ。未確認ではない。資格なし。両者の差は法律上の飾りではなかった。異議を申し立てる門そのものが存在しないことを示していた。

レイチェルは配管図を拡大し、少女の母に水を手渡した。だが彼女は知っていた。自分の手で一杯の水を渡せても、市が一人を「数えない」と決めた仕組みまでは、それだけで変えられない。

03 — エレナ・ヴォスの三つの履歴

エイドリアン・タイレルは、元大臣が持ち出した物理認証カードを見るなり、照明を落とした。古い記録媒体の保護膜には、現在のネットワーク認証とは異なる光学的な刻印が施されていた。読み取りには、旧タイレル系の実物の装置を用いる必要がある。

「どこで手に入れた？」

「三時間前に大臣でなくなった男から」ロイが答えた。

「言葉は理解できる。なぜ無事にここへ持ってこられたのかは理解できない」

エイドリアンはカードの縁を確認し、別の端末に三つの履歴を表示した。どれも見出しは同じだった。

ELENA VOSS。

第一の履歴は、四十年以上前に水処理制御系を設計した女性技師のもの。第二は、それより後に政府の資源評価委員会で活動した統計官。第三は比較的新しい時期に共同インフラ契約を承認した責任者だった。それぞれの写真も公印も存在する。しかし年齢を積み重ねると計算が合わない。

「同じ人なのか？」ロイが尋ねる。

「三つの記録はそう主張している。最初の技師は最後の契約時には七十六歳のはずだ。ところが記録上の容貌と生体指標は、同じ経過時間を示していない」

「偽造では？」

「その可能性はある。ただし署名は本物だ。互いにつながっていない機関が、それぞれ当時の装置で認証している」

ロイは自分の身体を思い浮かべた。死んだはずの人物の顔と記憶を持つ身体。だが本人の意識が途切れず続いたかどうかは、未だ証明されていない。

「彼女も俺と同じなのか？」

「 その根拠はない」エイドリアンは即答した。「 君自身に関する未解決の問いを、他人の正体を断定する道具にしてはいけない」

「 では、何を確かめる」

「 三つの機関が、なぜ同じ名前の人物の『 連続した存在』を証明する必要があったのかを調べる」

物理カードの深部から、ようやく一行の命令が浮かび上がった。原記録を開くには、認証済みの証人が必要。

エイドリアンが小さくうなずいた。「そういうことか。起源の記録は、証人を必要としている」

ロイはその語を聞き、BOOK V の白い部屋を思い出した。あの事件でも、記録は誰かの署名を得るために存在していたのではなかった。拒絶が実際に起きたことを、他者が見ていたという事実が重要だった。

04 — 五人の異なる答え

MBU-09 の五人は、同じ部屋にいても同じ方向を見ていなかった。ゴライアスは外側の通路を守り、シェイドは監視網の死角を探す。ベクターは十七人の居住地と供給予測を重ね合わせ、ヌルは人工生命用の医療部材の認証状態を確認していた。クロノスだけが、壁に映されたヴォスの古い写真をじっと見つめている。

「 無作為ではない」ベクターが言った。

「 共通項目ならもう調べたわ」レイチェルが返す。

「 共通項目を探しているんじゃない。モデルが彼らを将来どう扱う予定だったかを見ている」

表示された予測には、実際の供給不足が発生する前に対象住民が地区の需要計算から消される順序が示されていた。

「 不足に先回りして排除している」レイチェルが言った。

「 あるいは排除することで、予測上の不足を発生させている」ベクターは数値を指した。「 その違いを確かめなければ、どこへ避難させても同じことになる」

「 なら俺が運ぶ」ゴライアスが言った。「 別の地区でも拒否されたら、その先へ運ぶ」

「 いつまで？」ベクターが聞いた。

「 必要なだけだ」

彼らのあいだに沈黙が落ちた。ゴライアスは一度も計算表を見なかった。彼の答えは単純すぎるようでいて、少なくとも一人の市民を見捨てるための数字ではなかった。

ヌルが割り込む。「十七人のうち六人は依存型の医療インプラントを使っている。登録を取り消されれば、交換部材の注文も通らない。水だけの問題ではない」

「 ヴォスの名前は分かった」ロイが言う。

「名前はアクセス経路ではない」ヌルが返した。

そのときクロノスが写真を指した。

「二枚目だ」

「何が？」

「女の人の後ろの部屋。そこを見たことがある」

「君はその場にいたのか？」ロイが尋ねる。

「違う。写真が撮られた出来事を見たんじゃない。部屋を見た。その部屋は写真の日付より古い。でも、そこで聞こえた音は……」

少年は言葉を止めた。誰も続きを促さなかった。クロノスの観測に異常があることは知られていても、それが過去に行った証明にはならない。

「エイドリアンに話してくれ」ロイは言った。「ただし、誰にも君の答えを先に決めさせるな」

クロノスは一度だけうなずいた。五人が同じ命令で造られながら、すでに同じ答えを持たないことを、ロイはむしろ心強く感じた。

05 — 人物のいない名前

レイチェルは紙の履歴を水処理地区の割当表の横に並べた。エイドリアンが再構成したヴォスの活動場所を地図へ載せると、同じ座標が年代ごとに別の建物として登録されていた。取り壊されたはずの施設が再び現れ、その地下階だけが継続使用されている。

「記録がないんじゃない。隠すための規則がある」レイチェルが言った。

「地図を改変したのか」ロイが尋ねた。

「あるいは複数の時代の地図を、同じものとして扱っているのかもしれない」

エイドリアンはその地点に残された物理回線の番号を見つけた。行政ネットワークを迂回する古い接続だった。

ロイがレイチェルに言った。「一緒に来なくていい」

「行くつもりだったわ」

「彼女は君にも会いたがっている」

「なら、どうして十七人が家を失ったのか、直接聞く」

ヘイヴルは黙っていたが、視線が変わった。ロイが問い詰める前に、彼は告白した。

「その十七人が選ばれたのは、私が塔にいた夜より前だ。選別周期はすでに走っていた。水処理地区も対象に入っていた」

「知っていたの？」レイチェルが問い返す。

「試験運用があることは知っていた。誰が対象になるかは知らなかった」

「その違いがあなたにとって重要なの？」

「大臣でいられたころには、重要だった」

ヘイヴルは自分の言葉がどれほど空虚かを理解しているようだった。だが空虚な告白もまた記録する価値がある。ロイは彼の証言を保存した。

その夜、消された十七人の存在を保証しているのは、母親が娘の手を離さなかったこと、レイチェルが水を渡したこと、そして同じ場所にいた人々が互いの名前を呼んだことだった。都市の側はまだ、その事実を数に戻そうとはしない。

06 — 答える女

旧式の回線がつながったとき、画面には誰も映らなかった。声だけが届いた。静かで、音の端が少しも揺れない女の声だった。

「ロイ・バッティ」

「エレナ・ヴォスか」

「ええ」

「君のシステムは人々から水を奪っている」

「私のシステムは、供給を保証できる範囲を報告している」

「子供が自分の家へ入れなくなった」

「それは自治体の実装上の失敗ね」

「実装を組んだのは誰だ」

「私は配分モデルを作った。人間がそこに強制手段を接続した。彼らは、判断の責任を負うより、自動的に拒否する機構を好んだのよ」

「それでも君には責任がある」

「責任というものは、最後に装置に触れた者へ全量を移せる数字ではないわ」

「ならば、被害を受けた人々に会いに来い」

「会う。あなたが、私の仕組みが防いだ事態を見たあとで」

ロイは壁際に並ぶ人々を見た。母親が子の背をさすっている。

「NIL-11の専用媒体を制限したのは君か」

「そうよ」

「俺に何が起きるかを知っていて？」

「代替方式があることも知っていた」

「出力が制限され、すでに失った寿命を取り戻せない方式だ」

「ええ」

「なぜだ」

「元の媒体は別の場所で必要だった」

「誰に？」

「いま答えれば、あなたは私が出すすべての数字を嘘だと思うでしょう。施設へ来なさい。大臣も、レイチェルも連れて。五人のうち誰でも望む者を連れてきて構わない」

「その五人を俺に差し向けたのは君だ」

「私は問いを承認した。手段を選んだのは大臣よ」

「解体を命じられたのは五人の人間だ」

「それは間違いだった」

「認めれば終わると？」

「いいえ。認めなければ、次の会話は始める価値さえない」

通信が切れた。

「全部認めたの？」レイチェルが尋ねた。

「少なくとも言葉では」ロイは答えた。

「安心できないわね」

「ああ。まったくだ」

ロイは、相手が罪の一部を認めることで、さらに大きな争点へ誘い込もうとしていると感じた。それでも聞く必要がある。あの女は、なぜロイの存在を「数えられない例外」と呼ぶのか。

07 — 数字の代償

ベクターが施設の水量計を解析すると、政府の予測表では使えないと分類されていた供給経路が、実際には正常に働いていることが分かった。レイチェルの独立浄化設備だった。

「これは私のインフラよ」レイチェルが言った。

「そのとおり」ベクターが答える。「ここからの供給を加えれば、九日間は不足分を埋められる。だがモデルは、この水を数に入れていない。君の設備に対する法的認可が別の区分だからだ」

傍らの住民が尋ねた。「認可の種類が違うと、水が汚くなるんですか？」

「ならない」レイチェルが答えた。「政府がその水を『数えてよい』かが変わるだけ」

シェイドは十七人の抹消時刻と警備命令を並べた。配分表の数値が変わった直後に、ゲートの権限が変わっている。配管は外されていない。貯水池も空になっていない。

「権利だけが、瞬時に無効になった」レイチェルが言った。

「では供給問題ではないのか？」ロイが尋ねる。

「全部が嘘とは言えない」ベクターが言った。「交換期限が迫った膜も実在する。ここを見誤れば、俺たちもEDENと同じように現実を都合よく扱うことになる」

「計算がどちらの味方かで変わってはいけない」ロイは答えた。

「もし数字が、一人を消すしかないと告げたら？」ベクターが問う。

「その結果を受け入れる前に、前提を一つ残らず調べる」

ベクターは少しだけ目を伏せた。彼にはヴォスの合理性が見えていた。一方で、その合理性を信じた結果、具体的な人間が資格欄から消えることも見えている。

ヌルは依存型インプラントを持つ住民の補助認証を、医療上の緊急措置として仮登録した。ゴライアスは給水車の重い弁を自分の手で開き、シェイドは監視の盲点に仮設通路を用意した。いずれも都市全体の解決にはならない。だがその夜、水を飲めた人はいた。

数字の誤りを見つけることと、数字の外へ追いやられた人間を守ること。ロイはどちらか片方だけでは足りないのだと理解した。

08 — 証人を必要とする起源

夜明け前、エイドリアンの旧式読取装置が低く音を立てた。物理カードの隠し層から起源記録の表題が現れ、続いて日時と施設識別子、そして読み込みを拒否する条件が表示された。

認証済みの証人が必要。

「偽造の可能性は？」ロイが尋ねた。

「当然ある。認証は真実そのものではない」エイドリアンは画面を拡大した。「ただし偽造なら、作った者は当時のオフライン認証技術を完全に理解している」

証人欄の形式は、単に署名の有無を調べるものではなかった。証言を求める前に、その人物が自分の意思で参加するかを確認しなければ、次へ進めない。

クロノスが装置に近づいた。古い写真の部屋を見たと言った少年は、画面を見上げながら何も話さない。

エイドリアンはしゃがみ、少年と目の高さを合わせた。

「君の観測を記録してもいいか？」

「僕を表に出す必要はない」クロノスが答えた。「僕が同意しているかを聞いて」

「では、同意するか？」

「同意する」

装置は、観測証言と本人の同意を別々に保存した。ロイはそれを見て、白い部屋で交わされた言葉を思い出した。そこでは拒絶する権利が、単なる記録の末尾に置かれた小さな注意書きではなかった。

画面に新しい索引が開いた。エレナ・ヴォスという名の周囲を、三つの異なる時代の署名が取り巻く。ただし同じ人物が三度生きたことの証明でも、別人が名前を受け継いだ証明でもない。

「これでヴォスが三人だと分かったわけじゃない」エイドリアンが言った。

「誰かがその質問を予想していたことは分かった」ロイが答えた。

起源記録の残りは、まだ封じられたままだった。開くためには施設へ赴く必要がある。先ほどの女の招待は、単なる挑発ではなかったのだ。

レイチェルは浄化設備の稼働表を閉じた。十七人の受給資格は依然として復旧していない。しかし仮設の水と医療だけは確保できた。少なくとも彼らには、朝を迎えるための時間がある。

ロイは窓の外を見た。雨は弱まり、薄い灰色の光が水路の上に漂っている。

「行こう」

誰も、その一言を命令とは受け取らなかった。五人の追跡者を含め、部屋にいる全員が自分の判断で次の場所へ向かうのだ。

彼らが知っているのは、ヴォスが存在しない人物だから記録にないのではない、ということだけだった。むしろ誰かが、彼女の存在を証明するために多すぎる記録を必要とした。その理由こそが、新しい事件の核心にある。